

【第38回大会個別発表抄録】

サイバネティックな眼でコロナ禍をみる

—ベイトソンの言説の活用—

遠藤 麻友美 (岩手大学保健管理センター)・奥野 雅子 (岩手大学)

世界的流行をみせた COVID-19 は、人々の生活に災害同様の大きな影響を与え“コロナ禍”と呼ばれた。コロナ禍はこれまで当たり前に行われてきたコミュニケーションを制限し、また、行われていなかったコミュニケーションについて考える機会をもたらした。家族療法の基盤となる哲学を提示したグレゴリー・ベイトソンは、人間の精神(mind)とは何であるか、生命世界という生態系における精神の認識について論じた。その中で、ベイトソンはサイバネティクス理論(Weiner, 1957)に基づき、個とシステムのコミュニケーションの相互作用についても思索している。

サイバネティクス理論とは、通信の結果のフィードバックを受け、軌道修正をするという循環を繰り返すことにより目的を達成するという考え方である。この研究では、人間がサイバネティックにコミュニケーションとフィードバックを繰り返すことで達成しようとしている目的は、その個人にとっての Well-Being であると考え、コロナ禍が我々の目標達成にどう影響したのかについて、ベイトソンの言説を活用して検討した。

コロナ禍により、関係性の中で共有され最適化されてきたコミュニケーションのパターンが、いつも通りでは上手くいかない事態や状況、ベイトソンの言うところの“ノイズ”が発生したと考えられる。それは、個人間や家族といったミクロな関係性から、国や社会といったマクロな関係性にまで等しく影響した。例えば、父親が家で過ごす時間が増えると、家庭内でこれまで当然のように母子だけで行われていたコミュニケーションに父親の存在が加わることで「いつも通り」には行かなくなる。また、当たり前に行われてきた経済活動が行われないことで「いつも通り」に会社が運営できなくなる、といった状況である。

ベイトソンはサイバネティックなシステムにはネガティブ・フィードバックが起こり、システムの状態を安定した状態に保とうとする自己制御性が働くとしている。その考えに基づくと、父親不在であった家庭というシステムに父親が存在するというノイズが発生した場合、そのシステムは父親不在時のパターンへ戻ろうとして、なんとか父親を排除しようコミュニケーションを取ることが考えられる。あるいは、新たなコミュニケーションのパターンを構築し、システムの構成員内でそのパターンを共有するという選択肢を取ることも考えられる。ノイズによるパターンの変化が関係性の破たんにつながることもある。この場合、ノイズが破たんの原因のように考えがちであるが、サイバネティックに考えると、破たんするシステムにはポジティブ・フィードバックを繰り返すパターンが内在しており、ノイズという負荷がかかって顕在化すると考える。

人間がそれぞれの Well-Being を達成目標としてコミュニケーションを行っているとなると、ノイズは新しいパターンを生み、その可能性を考えるきっかけとして捉えられるのではないだろうか。コロナ禍を良くも悪くも原因とせず、常に Well-Being につながるコミュニケーションを模索する視点を持つことが重要であると考ええる。